

【研究ノート】

徳島県からの北海道移住者と「勇足歌舞伎」

—— 移住者と演劇活動の関連について ——

高橋克依

研究ノート

徳島県からの北海道移住者と「勇足歌舞伎」 ——移住者と演劇活動の関連について——

高橋 克 依

目次

- I. はじめに
- II. 本別・勇足への入植について
- III. 演劇活動について
- IV. まとめにかえて：今後の問題と疑問点の整理

I. はじめに

北海道中川郡本別町は、1897(明治30)年以降、和人たちによる本格的な移住が開始されて成立した地である。現在の本別中心部より西方に勇足ゆうたりと呼ばれる地区がある。ここでかつて移住者たちの間でおこなわれていた娯楽の中に、現在「勇足歌舞伎」という名でその存在が伝えられている演劇活動がある。

本稿の目的は、この「勇足歌舞伎」の実態や移住者の社会的背景に関わる事情について、現在の時点で明らかとなった事柄をまとめ、あわせてここまでの考察と、移住者が勇足にもたらした演劇活動の意義についての研究をまとめるために残されている疑問点などを挙げて、次稿の足がかりとするものである。

II. 本別・勇足への入植について

十勝を開墾するためとして晩成社を組織した依田勉三は、1882(明治15)年、鈴木銃太郎と現地を視察したおり、利別川を本別までのぼる。しかしながら、このころ本別に住ん

でいた人々の名前や職業ははっきりしないものがほとんどである。『本別町史』には、「無名の居住者の記録も見当たらない」(167)という表現も出てくるが、定住者の存在はほぼ無視できるような時代が続いたと見られる。こうした時期を経た後、本別において最初の和人定住者として記録される人物が登場する。それは長野県人の篠原相松や宮城県人菅野修助であり、記録によって、若干の前後はあるものの、1893(明治26)年頃のことである。『北海道殖民状況報文 十勝國』には、

同[明治]二十六年長野縣人篠原相松ナルモノ「アイヌ」ト交易ノ爲メ來リテ土着シ次テ翌二十七年宮城縣人菅野修助亦交易ヲ主トシテ移住ス(174)

と記されている。ちなみに『本別町史』には、篠原の移住について上記の『状況報文』の記述のほか、『本別町五十年史』の明治29年、篠原相松君之碑に刻まれた明治28年という、三つの年を紹介し、記録が不統一であることを記している。(167)

次に、現在本別町勇足と呼ばれている地区への和人入植史についてまとめたい。勇足小学校開校80年記念誌の『ほろけなし』には、当時の地理について、地名の由来も含め、以下のように書かれている。

通称勇足というのは、幌蓋村(地名アイヌ語によると、ホロケナシケセ村=大きな・川ばたの木原)と勇足村(エサンヒタラ村=突き出た川原)の二村を総称し、い

ずれも地形から名付けられたもので、当時利別川の流路が現在の国道二四二号線近くまで、たれさがるように円状の曲線を描いて東に寄っていたので、川原が突き出てこのように呼ばれたものと思われる。(39)

1896(明治29)年に終了したこの地域の植民地区画事業終了を受け、未開地1000ヘクタール余を畑目的で貸し付けの許可を得たのは、徳島県の衆議院議員板東勘五郎、徳島県県会議長小笠原鶴太郎、大阪府の衆議院議員秋岡義一、三重県の衆議院議員木村誓太郎の四人によって組織された組合であり、当初は板東農場と名付けられた。そして1895(明治28)年から徳島県那賀郡立江村々長をつとめていた東條儀三郎に、小作人募集、移住開発、開墾管理等一切の業務をまかせ、徳島県に移住者を募ることになる。『本別町史』には「小作人は主に徳島県的那賀、勝浦および海部の三郡から募集した」(450)とある。これら三郡は、隣接しており、県内の南部に位置する。なお立江村は現在徳島県小松島市に編入されている。

では、人々の具体的な移住の動機にはどのようなものがあったのだろうか。そのいくつかを探ってみよう。

当該の地域は1895(明治28)年におきた洪水(那賀川のはん濫)によって、大きな被害を受けている。これが、彼らに移住を決意させる大きな理由のひとつとして働くことになったようだ。『本別町生活文化誌』の中で東條康子は以下のように語る。

そもそも明治二八(一八九五)年に徳島で水害に遭っているんです。那賀川がはん濫して、水害で町全体が壊滅したんです。それで新しいところに行きたいということで(後略)(164)

ここで言う「水害」については、『小松島市史』(中巻)の中では、

八月二二日、高知県に上陸した台風のため、一日雨量、那賀郡驚敷で四〇一ミリメート

ル、小松島で一七七ミリメートルに達し、那賀川、勝浦川等で洪水の被害が生じた。(519)

とあり、これを指しているものと思われる。大規模な水害は、村人たちに移住を決意させるのにはじゅうぶんな原因であったのかもしれない。しかしまた、『生活文化誌』の中には、糸田幸利の語りとして以下のような記録もある。

なぜ、北海道に来たかという、結局、内地の次男・三男のいるところがありません。新しい開拓地がもらえるという夢をふくらませて来たのでしょうか。(191)

このように、人口の増加とそれに伴う耕作地の不足を原因として、新しい土地を北海道に求めたという動機が存在も示唆されているのである。

またさらには、『小松島市史』(中巻)の中には、当時の小作人のおかれていた不利な立場を指摘している部分もある。ここでは、『立江町史』に掲載された明治16年から20年の間のとある小作契約を例に取り、「立江村を始め各村々には(中略)地主には有利で小作者には義務のみをおしつける文書契約が数多く取り交された」(277)としている。同書の記録によれば、「明治一六年には総農家数の一九%が小作農家であったが明治四〇年には二八・六%が小作農に転落している」(278)という。その小作農たちが、強い不満を募らせていたことも想像に難くない。この地域の北海道移住の直接的動機の背後には、こうした複合的な理由が存在し、それが彼らを北海道へと駆り立てたのであることが推測される。

しかし、こればかりではない。そもそも徳島には、一般的に北海道移住の気運が早くから芽生えていた。『徳島県史』(第五巻)には以下のような記述がある。

阿波国から他地域への移住は、藩政期からかなりの数にのぼっていたようである

が、行政上の奨励がみられるようになったのは明治二年（一八六九）以後のようである。

明治二年、当時の徳島藩庁は「北海道移民奨励」の布令を出した。

同書では、この布令そのものは、明治政府の政策に従ったものとしながらも、翌年に淡路の稲田家に発生した庚午事変（稲田騒動）によって、家士たちが日高への移住の命令を受けたことを考え合わせると、「この布令は明治以後の本県人の県外移住の一つのタイプをしめす基礎となった」としているのである（202-3）。そして以降、「他府県への人口流出という傾向は、明治三十年代、四十年と年代を経過するとともにますます増大していった」（204）とあるように、県外移住、北海道移住はこのころかなりその数や頻度をましていったのである。

東條に率いられた一行もそうした移住者のうちの一团であり、彼は管理人として明治30年、板東農場に他の農家とともに移り住むこととなった。

同年には、仙美里地区方面にも函館農場が開設され、鈴木勝太郎らが移住を始めている。まさに本別にとってこれら広大な農場の開設にはじまる和人移住時代の幕開け、すなわち後の本別の町が形成される緒についた時と言ってよい年であったのである。

Ⅲ. 演劇活動について

このころの移住地における演劇活動については極めて資料が少ないのが実情である。いつどのように始まって、どのように終わったのか、明確に示すものにも乏しい。しかしながら、現在に至るまで、わずかながらではあるが、その存在が語り継がれていることを考えるとき、勇足の人々の演劇に対する思いや、コミュニティと演劇との関係性を類推することは可能である。ここでは、入手できる限り

の資料を用いながら、状況を整理しようと思う。

まず、明治・大正期、すなわち移住してきた者たちの影響力が強い時代についての記録である。このころの様子を明確に示すものはとりわけ数が少ない。しかし、東條康子が『生活文化誌』の中に語ることばがその手がかりを教えている。

もっと古くは祖父〔東條儀三郎〕の代の人々の中で徳島に居た人や徳島から遊びに来た人が、たまに興に乗り男踊りと女踊りを踊っていた。（816）

ここで言われている男踊り・女踊りとは、とりもおさず徳島のよしこの節やそれに合わせたいわゆる阿波踊りを指していることは明らかだろう。つまり儀三郎の代すなわち移住してきた人々らが故郷の芸能を、移住先でも少なくとも自らの楽しみとしていたことがわかる。そしてこの踊りが、彼らの演劇活動の原点にあるものと考えられる。本別のコミュニティ誌『ほんべつパラダイス』1995年秋号によれば、

まつりに欠かすことのできなかったのは遙かなるふる里の郷土芸能であった「阿波浄瑠璃」である。

「阿波浄瑠璃」は「勇足歌舞伎」として大正7年頃より上演されることになる。(8)とある。この頃、移住者たちの娯楽であった踊りや浄瑠璃が本格的な歌舞伎芝居へと発展し演じられるようになったと考えてよいのであろう。しかも、やはり東條康子の語る、

この辺りで浄瑠璃をやるのは徳島県の立江から移住してきた人で、徳島県は浄瑠璃の盛んなところである。（中略）徳島県ではお祭りになると浄瑠璃をあちこちの小屋で演じていて、義太夫節を語り三味線弾きの一組で口がかかった。（中略）祖父は相当な腕前の持ち主の一人であったとも聞いている。（『生活文化誌』818）

にもあるように、彼らは踊りのみならず、浄

瑠璃と歌舞伎をも楽しんでいたことが明らかとなっている。

『生活文化誌』818ページには、大正8～13年ころの写真として、山下伝一、糸田繁敬、鶴羽倉太郎らが、「熊谷陣屋」を演じている場面の写真が掲載されている。しかも、山下と鶴羽には、それぞれ芸名もつけられていることがそこから見て取れる(糸田繁敬は、明治31年徳島県勝浦郡福原村から移住した糸田六三郎の長男)。また、素人による演劇としては一般的なことであるが、資金はいわゆる「はな」と呼ばれる祝儀によった。

稲岡雅十が(花の御礼。これより御礼金は一封、糸田御氏様ひいきご最賃賜って勸進元に下しおかれる。これより御礼、…。またまた御礼…。)切り口上を含め口上を担当していた。(『生活文化誌』819)

と紹介されている。

上演舞台は、地元の八幡神社におかれた。『ほろけなし』は、1901(明治34)年9月のできごととして、

住民一五五戸に達したので、村民協議により勇足村第十五線東一号八十八番の地を選び宮殿を建立し阿波国那賀郡立江村鎮座郷社八幡神社の祭神の御分霊を、当勇足村氏神に勧請奉祀し、二十五日遷宮式を挙行了した。(45)

と記している。この八幡神社は、現在勇足神社として同じ場所に存在するものである。9月の祭りの際には「夜明けまで」、そして昭和初期からは「現代物」までをおりませ、さかんに演じ続けられたという記録がある。(『生活文化誌』816)

ところで、彼らの芝居の力量に関することについて、どのようなものがあるか、『生活文化誌』の記述からまとめておきたい。糸田幸利(糸田六三郎の孫)は、

神社の祭りやその他で義太夫付きの本格的歌舞伎を演じていた。移住者の一人鎌田造酒蔵(元町長鎌田照三の祖父)は義太夫三

味線の師範格で三味線でどこに行ってもお金が取れた職業人的な人と伝えられている。(819)

と語って、三味線の実力者の存在を示している。こればかりではない。岡林勲は、「四国出身の坂野清一郎が座長として勇足歌舞伎一座を作り、釧路や根室に興業に行ったことがある。」(819)と語っている。ここに登場する坂野清一郎とは、別のページで「坂野さんという芝居のお師匠さんもいた。だから勇足の歌舞伎といたら、北見の方まで名が売れていた。」(語り手不明：196)という証言の中に出てくる坂野と同一人物であろう。勇足の演劇を牽引した人物について調べると、こうした複数の技量のある人々が拳がり、彼らによって充実した演劇活動がおこなわれていたであろうことを類推させてくれる。これは、彼らの出身地の特質にもよるのであろうが、しっかりした技量の伝承がおこなわれていることがわかる。この技量と伝承能力によって、明治・大正期のみならず、昭和に入ってから、すなわち移住者の子や孫の時代になっても、一定の規模を持って、浄瑠璃や歌舞伎がこの地でおこなわれ、周囲の人々にも認知されていたと考えられるのである。

この演劇活動にはいくつかの特徴が指摘できる。まず、徳島から持ち込まれたものであることである。筆者はかつて、篠路村烈々布の素人芝居についての研究をおこなったが、篠路村の場合は、東京など中央の演劇の影響を強く受けたものであった(拙著『篠路村烈々布素人芝居』参照)。それに比べ、勇足の場合は、その成立においては特に徳島で盛んであった人形浄瑠璃の影響が色濃い。『徳島県史』(第五巻)には

「阿波の一口浄瑠璃」といわれて、阿波の人間は宴席などではいかなる人でも、浄瑠璃の一口ぐらい語れないものはないという普及ぶり(以下略)(656)

とあるように、地元において発達した浄瑠璃

文化の影響を受けていたと思われる人々がそのまま勇足に移住していることによる、母村文化の直接的流入が指摘されてよいであろう。

次に、この地域はほとんどの移住者が徳島県人で占められていたことである。前述したように、町史等によれば、当初、移住者は隣接する那賀郡、勝浦郡、海部郡の三郡から募集された。そしてそれ以降は、移住者による勧誘がさかんにおこなわれていたこと、そして親戚知人を主体に移住させていたとのことである。『生活文化誌』には、「勇足地区は、全部四国衆が開拓したのです。」(191)という記述も見える。これは、板東農場への移住者が、近隣縁者等で占められ、ほぼ同一の生活文化様式を持った人々であり、浄瑠璃や芝居に対しての価値観も類似したものであったことを示している。一方で、函館農場は、福井県、岐阜県、道内、宮城県など様々な方面から移住者を迎えていた。生活文化の相違が現れやすいことは、想像に難くない。近隣どうしの農場とはいえ、移住形態の違いが注目に値する。

さらに、前述の充実した指導者の存在が挙げられる。三味線や歌舞伎に精通した人材が豊富にいたことなどが記録されている点は、篠路村の大沼三四郎のような強いリーダーシップを発揮する人物を中心におこなわれていたというよりも、むしろ複数による専門化された集団的指導能力が発揮されていたこととして注目される。

そして、地域的な結束力が早期から機能していた点も見逃すことができない。1902(明治35)年に東条によって勇足協議会、また1910(明治43)年には勇足青年会が組織される。特に前者は、東条が立江村時代のやり方にならって組織したものであるという。勇足協議会会則(昭和39年実施)の第1条には「この会は、明治30年勇足農場の開設によって、同35年移住者の意思機関として創立したには

じまり(以下略)」とあるし、また第3条には「この会は、勇足地域内各自治会間の親和を図り(以下略)」とある。現代では自治会を束ねる広域的な組織として機能しているようであるが、ここにあるように移住当時から現在まで継承されているものであり、かつ他地域には例のない独自の自治組織であるという。こうした組織が、演劇活動の運営にあたっていたわけであるが、注目すべきは、その結成年の早さである。勇足協議会は最初の移住から早くも5年で設置されたことになる。これは、元村長として、また現管理人としての東条の政治力の高さと、人々の団結力が移住当初から発揮されていたことを物語るものであろう。つまり、この演劇活動は、もともと同一の文化圏にあった人々の上に、リーダーの政治的手腕が発揮されて団結ができあがっていた土壌の上に発生したものとといえるのである。篠路の場合はどうであろうか。出身地を異にする人々が演劇活動を始めたために団結をするようになり、この団結心がリーダーであった大沼三四郎を後に篠路村村長という政治家へと押し上げるという流れをもっていた。勇足と篠路では、全く反対の状況があったことがわかるのである。

IV. まとめにかえて：今後の問題と疑問点の整理

今後、「勇足歌舞伎」の研究を進めてゆくにあたっては、いくつかの問題を乗り越えなくてはならない。まずその第一として、そもそもなぜ、東条儀三郎に管理人の話がもちあがったのかということさらには解決しなければならぬ。移住者は前述のように徳島県内の那賀、勝浦、海部の三郡から募集された。とすれば、この三群には他にも多くの村が存在し、そこには他にもリーダーとしてふさわしい人材がいたのではないのだろうか。確かに東条の政治力は優れたものがあり、移住者

を見事にまとめていた。例えば、『利別の流れ』によると、1898(明治31)年9月に起こった洪水は、「利別農場の入植者全員に被害を与えた」(25)という。このときの東條がおこなった救済措置と人々の反応については、以下のような記述がある。

罹災に応じた農機具生活物資の補給に全力を傾注速やかに、物心両面の立ち直りに家々を巡り精魂をこめ、それぞれの事情に応じた経営を指導するなど暖かい情義をもって接したので小作人の心も立ち直り気力が農場に再び溢れきて、親愛と敬愛の絆が確立され、開拓は一段と進捗していった。(26)

彼のこうした政治手腕と同様のものが、立江村村長時代に既に発揮されており、その実力を買われてと理解することは容易なことではある。しかし他に理由はないのであろうか。これは移住の背景をより明確にするためにも明らかにすべきことと考える。

そして第二に、どの程度まで「勇足歌舞伎」の実態が特定できるかということである。『本別町史』や『本別町生活文化誌』など、当時の聞き取りをまとめている書物もあるが、もし存在するのであれば、これ以外にどの程度当時の情報を収集できるかが重要な課題となる。さらに「勇足歌舞伎」と呼ばれるようになった時期もあきらかではない。

第三に、現在の資料を整理する上で、若干の混乱がみられるのが、「黒川格とすみれ劇団」との関係である。1994年10月25日発行の『ほんべつパラダイス』第3号には、「黒川格とすみれ劇団」に関する記述がある。記事によれば、黒川格は早稲田大学在学中、演劇に興味を持ち、中退して新派俳優喜多村緑郎に入門する。後に興行主タイモトの導きで本別にやってきて大衆演劇活動をはじめ。活動期間は、大正末から昭和21年ごろまでという。彼は劇団の座長のみならず、いくつかのペンネームを使い分け、台本の創作もしている。

全道各地を巡業し、評判は上々だったとのことである。これは素人芝居とは一線を画す、本別を中心とした興行芝居的な性格をもったものと考えられる。彼の親族である黒田キクは、格が芝居で使った小道具や台本を本別町歴史民俗資料館に寄贈している。筆者が2011年9月におこなった糸田達一氏への聞き取りによると、「勇足歌舞伎」関連の資料は、いったんすべて黒田キク氏に預けられ、その後まとめて本別町歴史民俗資料館へ寄贈されたとのことである。つまり、資料館の資料リストにだけ頼ると、すみれ劇団で使用されたものか、「勇足歌舞伎」で使用されたものか、判然としないものがある可能性がある。これらをうまく整理する必要がある。

第四に、勇足には人形が伝わった形跡が確認できないことも重要であろう。徳島は、これまで述べてきたように浄瑠璃の盛んな地域であり、それにあわせて人形を操るいわゆる人形浄瑠璃を発展させてきた。例えば、『パイオニアたちを支えた人形浄瑠璃』によると、徳島県那賀郡山口村出身の大東伊太郎と共に原田佐馬太(房太)、折野源蔵らが明治17(1884)年に東瀬棚村真駒内地区に移住するが、その後、明治28年に人形浄瑠璃座を設立させている(5-6)。このように人形が伝えられている場所があるのに対し、勇足の場合は人形浄瑠璃を演じた形跡がないのである。この違いはどこからくるのであろうか。

そして最後に、本別町歴史民俗資料館に展示されている和紙でできた衣装の由来である。これは、見たところ歌舞伎の衣装ではなく、浄瑠璃の語り手が着用したものと思われるが、大阪・唐物町・加嶋屋と読める印が押されている。なぜ和紙で作る必要があったのか、なぜ勇足に持ち込まれたのかという点も解明する必要がある。

「勇足歌舞伎」の由来と、それをはぐくんだ勇足についての研究は、以上のような問題の解決の先に次第に見えてくるものである。

そして素人芝居としての「勇足歌舞伎」の価値を移住者の歴史の中に記すことを最終目的としたい。

引用・参考文献

- 上原新一編。『ほろけなし』。本別町：勇足小学校開校八十年記念事業協賛会，昭和53。
- 河野久雄ほか。『勇足の歴史』。本別町：勇足青年学級，昭和38。
- 小松島市史編纂委員会編。『小松島市史』中巻。小松島市：徳島県小松島市役所，昭和56。
- 高橋克依。『篠路村烈々布素人芝居』。札幌：響文社，2009。
- 田村直一。『利別の流れ』徳島市：出版社名なし，平成9年8月。
- 仁木勝治，佐藤満俊。『パイオニアたちを支えた人形浄瑠璃』。東京：文化書房博文社，2010。
- 北海道廳殖民部拓殖課。『北海道殖民状況報文十勝國』。明治34。東京：北海道出版企画センター，昭和50。
- 本別町町史編さん委員会編。『本別町史』。本別町：本別町役場，昭和52。
- 本別町町史編さん委員会編。『本別町生活文化誌』。本別町：北海道本別町，平成14。
- 「ほんべつ昔語り③」。『ほんべつパラダイス』第3号（1994）：6。
- 「ほんべつ昔語り⑦」。『ほんべつパラダイス』第7号（1995）：8。
- 勇足協議会。『平成23年度定期総会』。平成23年2月25日。

[Abstract]

Settlers from Tokushima Prefecture to Hokkaido and *Yutari Kabuki* : On the Relationship between People and Theatricals

Katsuyori TAKAHASHI

This article is a preparatory survey on early settlers from Tokushima Prefecture to Hokkaido and their theatre movement. Most people who settled Yutari, which is now in Honbetsu-cho, Hokkaido, were from the south of Tokushima. Their leader was Gisaburo Tojo, former mayor of Tatsue Village. According to some evidence, they enjoyed playing *Kabuki* and *Joruri* during their leisure time and gained a reputation. However, there is no previous study on this activity. In order to make clear the actual conditions and the significance of the theatricals, detailed research must be done urgently. In this article, the importance of the activity and the settlers' cultural background, which are analyzed at the present stage, are presented. In addition, the final chapter lists the problems needing to be solved to complete the analysis. By these studies, a foothold to further discussion is established.

Key words : Hokkaido, Settler, Amateur Theatricals, *Kabuki*, *Joruri*